2016年度 修了

1歳代の道具操作場面における発達的変化について
― 他者との関係に着目して ―

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達･福祉臨床クラスター
下地　咲紀

本研究では，1 歳代の道具操作場面を観察し，その発達的変化について，他者との関係に着目して検討することを目的とした。

観察は 1 歳代の乳幼児 40 人に対して実施し，観察場面は描画場面（「円錯画：開始時の発声・描画」場面,「アンパンマン：開始時の命名・描画・再認指さし」場面）と積木操作場面（「積木の塔（5 個）：積木積み（5 個）」場面,「積木片付け（蓋付き箱）：全入・蓋」場面）で構成し，各場面には観察者との関わりを組み込んだ。

分析の結果,「円錯画：開始時の発声・描画」場面を除く各場面の通過率が 1 歳半頃に増加することから，従来通り発達の質的転換期の存在が示唆された。各場面の取り組み方の分析の結果，1 歳前半児は，操作の目的の保持を意味する「再認指さし」と「概括」は少なく，他者への働きかけである「完了アピール」と「アピール」は多かった。1 歳後半児は「再認指さし」と「概括」は多く,「完了アピール」と「アピール」は少なかった。

本研究の結果より，1 歳前半は社会的な「目的・手段」構造は未成立だが，音声や動作で他者に働きかけ,自己の行動に他者の注意を引き入れることで結果的に社会的な「目的・手段」構造に類似した行動を展開すると考えられ，1 歳後半は質的転換期を迎え，社会的な「目的・手段」構造が成立するが，それ故，目的を保持し，他者からの視線がないことに気づいても，他者に働きかけない内向的な姿が見られると考えられた。